



一般社団法人日本生態学会

No.41

2017年1月

ニュースレター

[目次]

第14回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム参加報告 1

記事

I. 学会各賞受賞者決定 3

II. 書評依頼図書 3

III. 寄贈図書 3

IV. 地区会報告 3

書評 14

京都大学生態学研究センターニュース 18

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

| 会員種別 | 年会費* | 大会発表 | 総会・委員 (選挙・被選挙権) |
|---------|--------|------|--------------------|
| 正会員（一般） | 9500円 | ○ | ○ |
| 正会員（学生） | 6500円 | ○ | ○ |
| 賛助会員 | 22000円 | × | × |

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・日本生態学会誌 600円
- ・Ecological Research 900円
- ・保全生態学研究 2000円**

**非会員の方の保全誌定期購読料は年額5000円です。なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません。

地区会費

正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区（200円）：北海道
- ・東北地区（600円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区（400円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区（0円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区（400円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区（400円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区（700円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口
〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター
E-mail: esj-post@bunken.co.jp
Tel: 03-5937-2721 Fax: 03-3368-2822

レポート「第14回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム」

高村典子・大西 勇・水野晃子・黒瀬奈緒子・三宅恵子・可知直毅

10月8日お茶の水女子大学で第14回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムが開催され200名程度の参加者があった。生態学会からも6名が参加しポスター発表を行ったので報告する。なお、会議の内容は後日男女共同参画学協会連絡会のホームページで公開される報告書に掲載される予定である。

分科会1「Unconscious biasについて考える」(水野、高村)

Unconscious biasとは、誰もが育つにあたって持つようになる、性別、人種、貧富、土地などに関する固定観念のこと。多くの場合はネガティブなイメージとして働く。自覚ができないので自制が不可能である。欧米では認知度が高く、ほとんどの大学での学部長・学科長対象に就任とともに最初に講習が行われる。男女という点でのUnconscious biasの具体例では、推薦書の表現が被推薦者の性別によって異なるなどが多数紹介された。Unconscious biasのための講習を行うと、効果はすぐに見られるが、講習を行わないとまたそのネガティブな影響が見られるようになる。そのためUnconscious biasの講習は常に必要なものとなる。

日本において数値で見られる例としては、日本遺伝学会や日本分子生物学会で一般講演発表者の女性比率が30%程度であるが、招待講演者は10%前後、シンポジウムオーガナイザーは10%未満というデータがある。シンポジウムオーガナイザーが女性だと、発表者が女性になる割合が増える。自薦(立候補)の発表には女性は、口頭発表よりもポスター発表を選びやすい傾向がある。

産業界では、現在は女性も男性も平均勤続年数は変わらないが、賃金格差が激しい。産業界でもアカデミアと同様、管理職の女性比率は上がらない。女性が増えるとプロダクトイノベーションが起きる(消費の決定権を握るのが女性なので、売れて儲かる商品を女性目線で作れる)、生産性が上がる(子育て中の女性は帰る時間が決まっているので濃い仕事ができる)、外からの評価が上がる、職場の風景が柔らくなる、会社の成績が上がるなど利点がある。マーケティングや営業に女性が増えてきているが、開発部門に女性が少なく、その分野の女性比率を高める必要がある。企業では女性を採用したくても、そもそも理系の学部卒・院卒の女子学生が少ない現状がある。

分科会2「女性のための賞の創設～その意義と効果を考える」(黒瀬、大西)

女性に限定した賞は、創設・運用時でも、例えば1)逆差別、2)賞の価値が低い、3)女性会員が著しく少なく継続できない、などの反対意見がある。しかし、実際にやりはじめた学協会では、授賞者に1)励みになった、

2)視野が広がり異分野の研究者との交流が増え共同研究が実現した(資生堂の女性限定賞)、などの利点もあった。資生堂女性研究者サイエンスグラントでは、ベビーシッター代や子ども同伴出張の際の旅費にも使えるなど、先駆的な取り組みが紹介された。日本女性科学者の会の賞は、女性に限定しておらずなおかつ若手の女性研究者だけでなく、若い時にそのような制度に恵まれなかったシニア世代の女性研究者にも受賞資格がある、というところが素晴らしいと思った。また、英国のアテナ・スワン憲章など、海外の事例紹介があった。今後、具体的な事例報告や経験を多く共有していくことは有意義だと感じた。(大西、黒瀬)

「参考になる他学会の取り組み」ポスターセッションから(大西)

日本植物学会：「イクボス」すなわち、職場でともに働く部下のライフワークバランスを考え、その人のキャリアと人生を応援しながら、組織の業績を出し、自らも仕事と私生活を楽しむことができる上司と育児・研究を両立している研究者とのパネルディスカッションを開催し150名以上の参加者があった。

日本遺伝学会：学会参加のために育児・介護に必要な費用を支援。自由度の高い補助で大会参加中の託児施設使用料や介添え者を呼ぶための費用などにも使える。

日本生物物理学会：優秀な若手講演者を複数名招待し最優秀者に「若手招待講演賞」を授与している。今年の年会では大学院生・若手研究者が就職するにあたり必要な自己分析についてのワークショップを行う予定。

日本植物生理学会：年会開催時の保育室利用の無料化(利用者は11名)。

日本生化学会：研究とラフイベントの両立で困っていることについてのアンケートをとり、現状の把握に努めながらワークショップなどの開催をしている。日本分子生物学会とともに「研究者のライフイベントを考える。目指すべき制度改正と環境改善」を開催。

全体会議「日本と世界の研究者・技術者—これまでの支援策と女性比率」パネル討論「まだまだ低い女性比率：伸ばすために何ができる？」(可知)

全体会議では、文部科学省の伊藤洋一科学技術・学術政策局長と経済産業省の飯村亜紀子大学連携推進室長が、行政の取組について紹介した。続いて、Machi Dilworth 沖縄科学技術大学院大学副学長が米国における取組を、野呂知加子日本大学教授が韓国の状況を紹介した。パネル討論では、宮井真千子森永製菓(株)社外取締役が企業(パナソニック)の状況を、中村淑子情報・システム研究機構女性研究者研究支援室コーディネーターが英国の取組(アテナ・スワン)について紹介後、女性研

究者の割合を高めるための方策について意見交換した。

生態学会は、2003年11月20日に男女共同参画学協会連絡会に正式加盟した。この時期、連絡会により第1回大規模アンケートが実施されていた。可知は、2004年10月7日に開催された第2回シンポジウムに将来計画専門委員長として初めて参加した。以来、毎年このシンポジウムに参加しているが、必ずしも恵まれた環境にあるとは言えない多くの女性研究者が、生き活きと活躍していることを知り、元気をもたらしてきた。男女共同参画の取組みは、過去には女性を主な対象とするものが相対的に多かったが、最近は男女ともに対象とする取組みもシンポジウムで紹介されるようになってきており、裾野が広がった印象を受けた。男女共同参画は、まさに男性、女性ともにかかわる問題であり、このシンポジウムへの男性研究者の参加がさらに増えることを期待したい。男女共同参画学協会連絡会の最大の功績は、大規模アンケートの実施とそのエビデンスデータに基づいて、さまざまな政策提案を実現させたことである。現在実施中の第4回大規模アンケートに多くの生態学会の会員が回答していただくことを期待している。

記 事

I. 学会各賞受賞者決定

第15回日本生態学会賞

なし

第21回日本生態学会宮地賞受賞者

石川尚人 (スイス連邦工科大学チューリッヒ校)

入江貴博 (東京大学海洋研究所)

大澤剛士 ((研) 農研機構農業環境変動研究センター)

吉原佑 (三重大大学生物資源学研究所)

第10回日本生態学会大島賞受賞者

中村隆俊 (東京農業大学生物産業学部生物生産学科)

長谷川雅美 (東邦大学理学部生物学科地理生態学研究室)

第5回日本生態学会奨励賞(鈴木賞)受賞者

伊東啓 (長崎大学 熱帯医学研究所 環境医学部門 国際保健学分野)

山崎絵理 (Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich, Switzerland)

安藤温子 ((研) 国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター)

II. 書評依頼図書 (2016年5月～2016年12月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 風呂田利夫・多留聖典 著「干潟生物観察図鑑」(2016) 160pp. 誠文堂新光社 ISBN:978-4-416-51616-4
2. 西條八東・三田村緒佐武 著「新編 湖沼調査法第2版」(2016) 264pp. 講談社 ISBN:978-4-06-155241-8
3. 落合啓二 著「ニホンカモシカ 行動と生態」(2016) 282pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060197
4. 畑瀬英男 著「フィールドの生物学 22 竜宮城は二つあった ウミガメの回遊行動と生活の多型」(2016) 232pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-02104-9
5. 中田兼介 著「びっくり!おどろき!動物まるごと大図鑑 1. 動物のふしぎなくらし」(2016) 40pp. ミネルヴァ書房 ISBN:978-4-623-07808-0
6. 本川雅治 編「日本のネズミ 多様性と進化」(2016) 246pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060231-0
7. 青木人志 著「日本の動物法第2版」(2016) 282pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063346-8
8. 水田拓 著「フィールドの生物学 23 「幻の鳥」オオトラツグミはキョローンと鳴く」(2016) 220pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-02118-6
9. 日本魚類学会自然保護委員会 編「淡水魚保全の挑戦 水辺のにぎわいを取り戻す理念と実践」(2016) 330pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-02126-1

III. 寄贈図書

1. 「うみうし通信 No.92」(2016) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
2. 「第39回公益財団法人山田科学振興財団事業報告書」(2016) 136pp. 公益財団法人山田科学振興財団
3. 「IAIA16実績報告書 インパクトアセスメント」(2016) 46pp. IAIA16日本委員会
4. 「公益財団法人鹿島学術振興財団 第40回2015年度年報」(2016) 346pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団
5. 「公益財団法人下中記念財団2016年報」(2016) 82pp. 公益財団法人下中記念財団

IV. 地区会報告

北海道地区会

2015年度地区会報告(2015年4月1日～2016年3月31日)

(1) 2017年度日本生態学会全国大会の担当を可決
2015年4月9日の役員会にて、2017年度の全国大会を北海道地区会が担当し、大会日程を「2018年3月14日(水)から3月18日(日)」とすることが可決された。

(2) 会長の選挙および地区役員(任期2016年4月～2018年3月)の信任投票の実施

役員選挙を実施し、2016年2月2日に北大地球環境科学研究科A809室にて、選挙管理委員および庶務により開票を行った。

開票結果:投票総数99票(内白票13)

次期会長は、日浦勉(北海道大学)が12票で選出された(次点、中村太士12票)。

上位2名は同票であった。その取り扱いについて定めはないが、日本生態学会の定款における会長選任に関する条項(同票の場合は年少者を当選者とする)を慣用し、選挙管理委員会で審議のうえ次期会長として日浦勉氏を選出することとした。

役員・会計監査信任投票:全員が信任された。

(3) 事務局引継ぎ

2016年2月16日、北大院環境科学院C201-1室にて、事務局の引継ぎを行った。

(4) 2015年度(平成27年度)北海道地区会大会の開催日時:2016年2月19日(金)9:20～17:40

場所:北海道大学 環境科学院/地球環境科学研究院 講義室D201

参加者:75名

【若手の部】

「ムクゲネズミ/Myodes rex/(Imaizumi, 1971)の新生息地の発見」荒井冬香(北大・環境科学)・齊藤隆(北大・FSC)

「ウグイにおける降海性の“逆”緯度クライン」山田健太郎(北大・環境科学)・臼井平(オホーツクミュージアムえさし)・小泉逸郎(北大・地球環境)

「希少淡水二枚貝によるカエルの越冬地提供を介した生態系間のつながり」三浦一輝・渡辺のぞみ(北大・環境科学)・根岸淳二郎(北大・地球環境)

「北海道十勝川水系における水生生物の比較系統地

理」大磯毅晃（北大・環境科学）・小泉逸郎（北大・地球環境）

「北海道阿寒湖におけるマリモ大量打ち寄せ現象を介した集団動態」熊谷七美（北大・院・環境科学）・若菜勇（釧路市教委・マリモ研）・大原雅（北大・地球環境）

「水辺のランドスケープ」片桐有乃・綿路昌史（札幌旭丘高校）

「洋酸性化がアマモ葉上固着生物に与える影響」伊藤美菜子（北大・環境科学）・仲岡雅裕（北大・FSC）

「岩礁潮間帯固着生物群集における季節動態のパターンとプロセスの垂直勾配に沿った変化」金森由妃（北大・環境科学）・深谷肇一（統数研）・野田隆史（北大・地球環境）

「遷移初期におけるヌマガヤ草地へのミズゴケの侵入定着パターン」宮崎紀子（北大・環境科学）・露崎史朗（北大・地球環境）

「群集集合：空間的および時間的ニッチ分化の重要性」平賀優大・岩崎藍子・大平昌史・金森由妃・胡之陽・立花道草（北大・環境科学）・奥田武弘（水研セ・国際水研）・深谷肇一（統数研）・野田隆史（北大・地球環境）

「無茎種と有茎種の中間的な開花特性を示すイブキスミレの繁殖生態に関する研究」篠原義典（北大・環境科学）・山岸洋貴（弘大・白神）・速水将人（北大・環境科学）・大西央士郎（信大・理工）・大原雅（北大・地球環境）

「Difference of the growth patterns of primary and secondary branches in the crowns of Sakhalin Spruce, *Picea glehnii* (F.Schmidt) Mast.」チェンレイ（Chen Lei）・Akihiro Sumida（北大・低温研）

「ナガボノシロワレモコウの花穂の役割と植食者（ゴマシジミ）に対する補償反応」内田葉子（北大・理）・北広島森の倶楽部ゴマシジミ研究部・大原雅（北大・地球環境）

「北海道に同所的に生息する3種の野ネズミにおけるタンニン摂取量の季節変化－ドングリ摂取と関連させて－」秋元佑香（北大・環境科学）・島田卓哉（森林総研・東北）・齊藤隆（北大・FSC）

「他個体の存在が成熟閾値を改変する：生活史二型をもつサクラマスにおける実験的検証」大久保隆（北大・環境科学）・高橋英佑（北大・FSC）・小泉逸郎（北大・地球環境）

「Differential individual growth as a factor of density-dependent mortality of prey」Evangelia Kazila・高津邦夫（北大・環境科学）・岸田治（北大・FSC）

「オスの給餌貢献度が高いほど複数回繁殖率が增加する」乃美大佑（北大・環境科学）・油田照秋（新潟大）・小泉逸郎（北大・地球環境）

「人為選択（ふ化放流）と自然選択（滝）が生活史分岐を左右する：同所的に棲むサクラマスとオショロコマにおける検証」佐橋玄記（北大・環境科学）・森田健太郎（北水研）

「遺伝的多様性の年次変化と密度・分散の関係：変動

様式が違うヤチネズミ 個体群の比較」秋元佐紀・山田敏也（北大・環境科学）・齊藤隆（北大・FSC）

【一般の部】

「標津湿原の植生と保全」神田房行（北方環境研究所）・吉野邦彦（筑波大・システム）川口小百合（北方環境研究所）・天神誠（有限会社メディアクラフト）

「オオバキスミレと近縁種における異なる繁殖様式の進化」速水将人（北大・環境科学）・工藤純一（鶴岡市）・武田真一（盛岡市）・小花宰（焼津市）・青島正幸（焼津市）・大原雅（北大・地球環境）

「Social networks in zebra finches during breeding season」Fumiaki Y. Nomano (Hokkaido Univ.)・Mylene M. Mariette (Deakin Univ.)・Simon C. Griffith (Macquarie Univ.)

「アザラシ類から、最近、見出された寄生虫病－海洋環境との変化に関係があるのだろうか」浅川満彦（酪農大・獣医）

「齢構成モデルを用いたサケ自然再生産の検討」鈴木健吾・渡邊久爾・平林幸弘・本多健太郎・斎藤寿彦（北水研）

「若手の部」では19件、「一般の部」で5件の研究発表があった。若手の部の発表の中から、三浦一輝（北大・環境科学）、Evangelia Kazila（北大・環境科学）、佐橋玄記（北大・環境科学）の3名に若手研究奨励賞を授与し、賞状と副賞を贈呈した。また、札幌旭丘高等学校生物部の活動を讃え「若葉賞」を授与した。

(5) 2015年度（平成27年度）北海道地区会総会の開催日時：2016年2月19日（金）17:40～18:00

場所：北海道大学 環境科学院 / 地球環境科学研究院 講義室 D201

庶務報告がなされ、了承された。

会計報告がなされ、了承された。

その他、EAFESについての案内アナウンスがなされた。

東北地区会

2015年活動報告

(1) 東北地区会第60回大会を開催

シンポジウム「大規模水域の環境負荷問題と水質汚濁管理～八郎湖の現状と琵琶湖の先行事例」

開催日：2015年12月5日

会場：秋田県健康増進交流センター（ユフォーレ）

「社会と科学の知の共創による流域ガバナンス－琵琶湖を事例として－」奥田昇（地球研）

「八郎湖における有害藍藻類（HABs）の季節的変動－2008年度を例にして－」岡野邦宏（秋田県大）

「八郎湖流域の水環境－特にリンの動態に着目して－」早川敦（秋田県大）

研究発表会・一般発表の部

開催日：2015年12月5－6日

会場：秋田県健康増進交流センター（ユフォーレ）

「東北太平洋沿岸干潟域のベントス相：市民参加型モニタリングによる2015年の結果」柚原剛・鈴木孝男・

占部城太郎（東北大）

「次世代 DNA シーケンサーを用いたハチミツ花粉の種の特定」長谷川陽一・浅野亮樹・高田克彦（秋田県大）

「植物群集の非ランダムな花色構成：互いに異なる在来種・その和を乱す外来種」牧野崇司・横山潤（山形大）

「有鐘・無殻絨毛虫類に対する捕食者の直接・間接効果」風間健宏・占部城太郎（東北大）

「秋田県のツキノワグマ低密度地域におけるベイズ法を用いた個体数推定」前橋尚弥・松下通也・星崎和彦（秋田県大）

「岩手県内におけるトノサマガエル属 2 種の種判別および分布状況」上野拓人・長井智也・東淳樹（岩手大）

「アカマツ倒木上におけるスギ実生の更新に影響を与える要因の解明」駒形泰之・深澤遊（東北大）

研究発表会・一般発表の部では「大会発表賞」が設けられ、大会参加者からの投票により、最優秀賞が牧野崇司氏（山形大）へ、優秀賞が風間健宏氏（東北大）と長谷川陽一氏（秋田県大）へ、それぞれ授与された。

研究発表会・研究相談の部

開催日：2015 年 12 月 6 日

会場：秋田県健康増進交流センター（ユフォーレ）

「オオバナノエンレイソウにおける分布域の決定要因：緯度勾配に沿った適応度成分の比較」佐々木駿・川村弥司子（山形大）・山岸洋貴（弘前大）・大原雅（北大）富松裕（山形大）

「チシマザサ齊枯死後の回復過程における閉鎖林冠下での面的クローン成長について」工藤恵梨・松尾歩（秋田県大）・金子悠一郎・富松裕（山形大）・蒔田明史（秋田県大）

「水辺ビオトープにおける生物多様性の保全～ゲンゴロウ類を指標生物として～」川崎敦・杉浦俊弘・馬場光久（北里大）

「深泥池におけるトンボ幼虫の食性から見た種間関係」山田紗友美（東北大）

「仙台湾東谷地干潟におけるチャンバー法を用いた生産分解速度の推定」尾崎隼斗（東北大）

(2) 地区委員会報告

2015 年度定例地区委員会は 2015 年 12 月 6 日に秋田県健康増進交流センター（ユフォーレ）において開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の 9 名であった。占部城太郎（地区委員長）・石田清・蒔田明史・星崎和彦・松政正俊・富松裕・黒沢高秀・小口理一（会計幹事）・牧野渡（庶務幹事）

<報告事項>

・庶務報告

- 1)2015 年 3 月 14 日：日本生態学会東北地区会会報 75 号を発行（メール配信）した。
- 2)2015 年 4 月 7 日：会報 75 号の会記に地区大会報告を追加し再発行（メール配信）した。
- 3)2015 年 5 月 16 日：岩手生態学ネットワーク【岩手発・

市民講座「人と自然と生態学】第 13 回「外来種は東北の自然をどう変えるのか？—農地、湖沼、海辺で起きていること—」（於・いわて県民情報交流センターアイーナ）を共催した。

- 4)2015 年 9 月 29 日：第 60 回地区大会及び総会の案内を送付した。
- 5)2015 年 11 月 9 日：第 60 回地区大会及び総会の案内（第二報）を送付した。
- 6)2015 年 12 月 1 日：第 60 回地区大会のプログラムを送付した。
- 7)2015 年 12 月 5 日：秋田県健康増進交流センター ユフォーレにおいて第 60 回地区大会一般発表(1 日目)およびシンポジウム（大規模水域の環境負荷問題と水質汚濁源の管理～八郎湖の現状と琵琶湖の先行事例）を開催した。
- 8)2015 年 12 月 6 日：ユフォーレにおいて地区委員会、地区大会一般発表（2 日目）と総会を開催した。
- 9)2015 年 12 月 6 日：岩手生態学ネットワーク【岩手発・市民講座「人と自然と生態学】第 14 回「未知なる隣人、イノシシとツキノワグマ」（於・アイーナ）を共催した。

・会計報告

2014 年度決算と会計監査、2015 年度中間報告ならびに今後の執行見込みについて報告があり、了承された。また学会法人化にともない会計は日本生態学会事務局が一括管理することとなったため、地区会独自の会計監査は必ずしも必要でない旨説明があった。

・岩手生態学ネットワーク報告

代表の松政正俊氏（岩手県）から、これまでの活動報告と会計報告がなされた。

<審議事項>

・自然保護専門委員（東北地区）候補の推薦

2016 年の委員交代においては、星崎和彦氏（秋田県）と黒沢高秀氏（福島県）を候補として推薦した上で、地区委員の互選により決定することとなった。

・岩手生態学ネットワーク 継続支援

地区会が共催する岩手生態学ネットワーク「市民講座」の 2016 年度会場費を支援することを議決した。これに伴い、「市民講座」の周知活動を jeconet に投稿する等従来以上に積極的に行うよう、松政氏へ要請された。

・2016 年度予算

上記の支援を含めた 2016 年度予算案について会計幹事より説明がなされ、了承された。

・2016 年地区委員選挙 選挙管理委員の推薦

占部地区委員長より高橋佑磨氏（東北大）と柚原剛氏（東北大）の 2 名が推薦され、了承された。

・次回、次々回開催地

次回大会を山形県で開催することが、昨年度地区委員会の決定事項に基づいて了承され、次々回大会は福島県へお願いすることとなった。

・地区会独自の会計監査の廃止

日本生態学会事務局が会計を一括管理しているため、地区会独自の会計監査は制度的に必ずしも必要ではないこと、さらに日本生態学会事務局の会計監査は次の

会計年度早々（2月位）に、つまり従来の地区会独自の会計監査（地区大会直前、11月位）に先立って行われるため、地区会独自の会計監査は「二度手間」に過ぎないことを鑑み、地区会独自の会計監査を廃止する提案が会計幹事よりなされ、現監事の鹿野秀一氏（東北大）もこれを了承していることも合わせて説明された。これを受けて、廃止の是非を地区大会総会で論議することとなった。

(3) 地区大会総会報告

2015年度東北地区会総会は、2015年12月6日にユフォーレにて開催され、総会議長に蒔田明史氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。

- ・地区委員会における庶務報告および会計報告が了承された。
- ・岩手生態学ネットワークの活動について報告がなされた。
- ・2015年度予算案が原案どおり承認された。また、地区会独自の会計監査を廃止することを議決した。
- ・次回地区大会を山形県で行うこと、次次回大会は福島県に願うことが了承された。
- ・選挙管理委員に高橋佑磨氏と柚原剛氏が推薦され、了承された。
- ・第63回全国大会（2016年3月20-24日、仙台市）への協力要請がなされた。

2016年活動報告

(1) 東北地区会第61回大会を開催

特別講演「動物と植物が感じる世界：生理学と生態学の立場から」

開催日：2016年10月29日

会場：ZAO センタープラザ

「チョウは世界をどう見るか」 蟻川謙太郎（総研大）

「植物は複雑な世界でどう生き抜くか」 山尾僚（弘前大）

一般講演・研究発表

開催日：2016年10月29-30日

会場：ZAO センタープラザ

「シロツメクサは血縁を認識して競争戦略を変える？ ～母と娘の資源分配～」 井上真登・彦坂幸毅（東北大）

「倒木上のコケがトウヒ実生の定着に与える間接効果の実証」 安藤洋子・深澤遊（東北大）

「オオバナノエンレイソウにおける繁殖成功度の緯度に沿った変異とその制限要因」 佐々木駿（山形大）・山岸洋貴（弘前大）・大原雅（北大）・富松裕（山形大）

「繁殖北限域におけるサシバの繁殖地選択に関する食物資源との関係の影響」 杉山大和・東敦樹（岩手大）

「系統、環境」どちらが生物機能を決めるか？—菌類・陸上植物・沈水植物の呼吸— 相澤拓・芳士戸啓・王莫非・森茂太（山形大）

「Convergence of shoot respiratory scaling among bamboo and trees (タケと樹木の呼吸スケーリングにおける収斂進化)」 王莫非・芳士戸啓・相澤拓・芳賀由晃・森茂太（山形大）

「種子から芽生えに生じる急激な代謝変動」 芳賀由晃・森茂太（山形大）

「How does shading affect the energy use allocation of *Fagus seedlings*?」 Citra Gilang Qur'ani, Mori Shigeta (Yamagata Univ)

「葉群動態光合成モデルの高度化」 田代萌・彦坂幸毅（東北大）

「ブナは根、葉のどちらから成長するか？ライゾトロンによる観察」 黒澤陽子・森茂太（山形大）

「ルイヨウマダラテントウの寄主利用パターンに繁殖干渉は関与しているか？」 篠田梨奈・藤山直之（山形大）

「異なる寄主植物を利用するカメノコハムシ類にみられる潜在的な繁殖干渉」 森戸航平・藤山直之（山形大）

「なぜ水草の多い池の水は綺麗なのか？水生植物 *Chara, Elodea* による植物プランクトンへの干渉型競争 (Allelopathy) の検証」 時田紘太郎・風間健宏（東北大）・山道真人（京大）・片野泉（奈良女大）・土居秀幸（兵庫県大）・吉田丈人（東大）・Hairston, N. G. (Cornell Univ)・占都城太郎（東北大）

「植物プランクトン群集の生産性に対する光：栄養塩バランスの影響」 風間健宏・時田紘太郎（東北大）・土居秀幸（兵庫県大）・片野泉（奈良女大）・吉田丈人（東大）・山道真人（京大）・占都城太郎（東北大）

「Effects of temperature on performance of Chinese mystery snail」 Yunita Kristanti, Satoru Sato (Yamagata Univ)

「ニューカレドニア産希少植物 *Oxera* 属樹種の保全遺伝学的研究」 藤田琴実・満行知花・綱本良啓（東北大）・井鷲裕司（京大）・Gildas Gâteblé (Institut Agronomique Néo-Calédonia)・陶山佳久（東北大）

「希少種イワキアブラガヤは外来種か？—1930年代の植物標本を用いた由来推定—」 佐藤晃平・首藤光太郎・黒沢高秀・兼子伸吾（福島大）

「キク科植物における気孔特性と生育地光環境」 見塩昌子・彦坂幸毅（東北大）

「落葉広葉樹林でのギャップ更新における、実生の光合成・成長可塑性と林床生存率とのトレードオフ」 小口理一（東北大）・日浦勉（北大）・彦坂幸毅（東北大）

一般講演・研究発表の部では「大会発表賞」が設けられ、大会参加者からの投票により、最優秀賞が藤田琴実氏（東北大）へ、優秀賞が篠田梨奈氏（山形大）と時田紘太郎氏（東北大）へ、それぞれ授与された。

一般講演・研究相談（ポスター発表）

開催日：2016年10月29日

会場：ZAO センタープラザ

「巨大樹木ジャイアントセコイアの個体内における体細胞間ゲノム変異の検出」 斎藤遥花・満行知花・綱本良啓（東北大）・石井弘明（神戸大）・陶山佳久（東北大）

「イノコヅチカメノコハムシとヒメカメノコハムシとの間の繁殖干渉の検出」 生田好成・藤山直之（山

形大)

「森林における種多様性と地下部の根系分布パターン」根岸有紀・清和研二(東北大)

「湿原および山岳氷河の堆積物から得られた植物試料を対象とした古代DNA分析」丹野たかね(東北大)・高原光(京都府大)・中澤文男(極地研)・陶山佳久(東北大)

「特殊な休眠様式を示す林床植物が部分的菌従属栄養である可能性」阿部繁樹(山形大)・橋本靖(帯畜大)・山岸洋貴(弘前大)・富松裕(山形大)

「1995年に一部が同調開花・枯死したチシマザサ個体群におけるジェネットの多様性と空間分布」大矢陽太・富松裕(山形大)・陶山佳久(東北大)・松尾歩・蒔田明史(秋田県大)

「ビデオ映像を用いたフジツボの空間分布について」吉田幸子(東北大)

「裏磐梯地域に点在する中小湖沼群の水生植物相と水質および水生外来生物の関係」遠藤優年・首藤光太郎・水澤玲子・黒沢高秀(福島大)

「種内における Plant-Soil Feedback 効果は個体群によって異なる」大崎晴菜・山尾僚(弘前大)

「花色の過分散を示す植物群集における訪花者の網羅的調査:花色で変わる訪花者タイプ?」牧野崇司・佐藤宏美・横山潤(山形大)

(2) 地区委員会報告

2016年度定例地区委員会は2016年10月29日にZAOセンタープラザにおいて開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の14名であった。陶山佳久(地区委員長)・杉山修一・蒔田明史・東淳樹・松政正俊・占部城太郎・彦坂幸毅・玉手英利・富松裕・兼子伸吾・黒沢高秀・小口理一(オブザーバー参加:前会計幹事)・牧野能士(会計幹事)・牧野渡(庶務幹事)

<報告事項>

・庶務報告

- 1)2016年2月29日:日本生態学会東北地区会ウェブサイトを開設した。
- 2)2016年2月29日:日本生態学会東北地区会会報76号をウェブサイトで公開した。
- 3)2016年3月20-24日:日本生態学会大会第63回大会仙台大会において、会場係などのサポートを行った。
- 4)2016年6月17日:地区委員選挙を公示し、被選挙人名簿および投票用紙を郵送した。
- 5)2016年7月20日:地区委員選挙の開票を行い、次の22名を選出し、当選通知と地区委員長投票用紙を発送した(敬称略、任期:2016年8月1日-2018年7月31日)
青森県:石田清・杉山修一・池田紘士(次点:山尾僚)
秋田県:星崎和彦・蒔田明史(次点:坂田ゆず)
岩手県:鈴木まほろ・松政正俊・東淳樹(次点:松木佐和子)
宮城県:陶山佳久・占部城太郎・彦坂弘毅・酒井聡樹・中静透・平吹嘉彦・清和研二・河田雅圭・

牧雅之・(次点:鹿野秀一、次々点:小口理一)

山形県:富松裕・玉手英利・林田光祐(次点:牧野崇司・森茂太)

福島県:黒沢高秀・兼子伸吾(次点:水沢玲子)

- 6)2016年7月29日:地区委員長選挙で陶山佳久氏(東北大)が選出された。後日、陶山地区委員長の委嘱により、庶務幹事は牧野渡氏(東北大)、会計監事は牧野能士氏(東北大)に決定した。
 - 7)2016年8月8日:第61回地区大会及び総会の案内をメール送信した。
 - 8)2016年8月21日:岩手生態学ネットワーク【岩手発・市民講座「人と自然と生態学」】第15回「私たちのエネルギーと生物・生態系」(於・アイーナ)を共催した。
 - 9)2016年10月8日:第61回地区大会プログラムをメール送信した。
 - 10)2016年10月29日:第61回地区大会山形大会をZAOセンタープラザにて開催し、定例地区委員会、特別講演「動物と植物が感じる世界:生理学と生態学の立場から」、一般講演(研究発表および研究相談ポスター)を行った。
 - 11)2016年10月30日:第61回地区大会山形大会の二日目をZAOセンタープラザにて開催し、一般講演(研究発表)と地区大会総会を行った。
 - 12)2016年12月17日-2017年2月26日:岩手県立博物館ならびに岩手県文化振興事業団主催【平成28年度テーマ展・大津波と三陸の生き物】(於・岩手県立博物館)を後援した。
- ・会計報告
会計幹事より、2015年度決算と会計監査について報告があり、了承された。
 - ・岩手生態学ネットワーク報告
代表の松政正俊委員より、2016年度の活動報告と会計報告がなされた。例年、春夏と秋冬の2回「市民講座」を開催していたが、2016年度秋冬の回は、岩手県立博物館にて開催される「平成28年度テーマ展・大津波と三陸の生き物」に差し替える旨、説明があった。
- ### <審議事項>
- ・日本生態学会東北地区会会則の改正
日本生態学会の一般社団法人化の際に廃止された「日本生態学会会則」を引用している日本生態学会東北地区会会則第二条および第三条について、第二条は「一般社団法人日本生態学会地区会、編集委員会、専門委員会等規則第2条」を、第三条は「一般社団法人日本生態学会定款」を、それぞれ引用する形に改めた会則改正案について、陶山地区委員長より説明がなされた。審議の結果、異議がなかったため、原案のまま地区大会総会に諮ることが承諾された。
 - ・次回、次々回地区大会開催地
次回大会を福島県で開催することが、昨年度地区委員会の決定事項に基づいて了承された。また次々回大会は青森県へお願いすることとなった。
 - ・岩手生態学ネットワーク 2017年度支援
松政委員から2017年度「市民講座」の「会場費お

よび宣伝費」として予算要求があり、審議の結果、50,000円を「支援費」として拠出することが承認された。同時に、「市民講座」の周知活動を、岩手県だけでなく他県向けにも従来以上に積極的に行うよう、松政委員へ要請された。

- ・2016年度予算執行状況および2017年度予算案
会計幹事より、2016年度予算執行状況について説明がなされ、了承された。次いで、2017年度予算案について説明がなされ、上記「支援費」を含めること、会費発行費をゼロとすることを修正した上で、了承された。
- (3) 地区大会総会報告
2016年度東北地区会総会は、2016年10月30日にZAOセンタープラザにおいて開催され、総会議長に富松裕氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。
- ・地区委員会における庶務報告および会計報告が了承された。
- ・岩手生態学ネットワークの活動について報告がなされた。
- ・日本生態学会東北地区会会則の改正案が原案どおり承認された。
- ・2016年度予算案が原案どおり承認された。
- ・次回地区大会を福島県で行うこと、次次回大会は青森県に願うことが了承された。

関東地区会

2016年(1月～12月)活動報告

- (1) 2016年1月21日(木)に京都大学東京オフィスで日本生態学会関東地区会国際シンポジウムを開催した。
テーマ:「Ecological statistics」
企画者: 深谷肇一・島谷健一郎(統計数理研究所)
概要:「近年の計算機の発達と利用可能なデータの質と量の変化によって、生態学研究における統計学の役割は一層大きくなってきている。本シンポジウムでは生態学や生物資源管理において統計学的手法を活用した研究を展開されている、あるいはこの分野の問題に対して有用な新しい方法論を研究されている研究者に講演していただいた。海外からのゲスト講演者としてアルバータ大学のSubhash R. Lele博士とフロリダ大学のJosé M. Ponciano博士に話題提供していただいた。また、彼らの共同研究者であるモンタナ州立大学のMark L. Taper博士、アイダホ大学のDennis Brian博士にもシンポジウムに参加していただいた。

【プログラム】

深谷肇一・島谷健一郎(統計数理研究所)「Introduction」
細将貴(京都大学 白眉センター/京都大学 理学研究科)・島谷健一郎(統計数理研究所)「Predation intensity on a free-living animal from a specific predator estimated by capture-mark-recapture method in combination with laboratory experiments」
Lele, Subhash R. (University of Alberta) 「Using expert

opinion for design, model selection and analysis of ecological surveys: A frequentist approach」

柴田泰宙(水産総合研究センター東北水産研究所)「A surplus production model considering movements between two areas using spatiotemporal differences in CPUE: application to sea raven *Hemipterus villosus* off Fukushima」

Ponciano, José Miguel (University of Florida) 「Using stochastic population dynamics models to estimate bacterial interaction strengths and model the stability properties of the human microbiome」

岩山幸治(龍谷大学)「Prediction of transcriptome under fluctuating field conditions」

飯島勇人(山梨県森林総合研究所)「Estimation of deer density and carrying capacity from multiple data and state-space model」

小森理(福井大学)「Asymmetric logistic regression model for estimation of abundance of global stock data」

深谷肇一・島谷健一郎(統計数理研究所)「Concluding remark and discussion」

- (2) 2016年1月23日(土)に東京大学農学生命科学研究科で日本生態学会関東地区会公開シンポジウムを開催した。

テーマ:「第一部: The tree of life in ecology and evolution」

「第二部: 生態学における学術出版の編集プロセスとトレンド」

企画者: 森章・辰巳晋一・岡田慶一(横浜国立大学環境情報研究院)

概要:「近年、生物の進化的な歴史背景に着目して現在の種間相互作用や生態系機能を説明するアプローチが発展してきた。本シンポジウムの第一部では、群集生態学の分野で著名なMarc Cadotte教授を招き、系統情報を使って群集集合則を推定する方法や生態系機能を予測する手法について、分かりやすく解説していただいた。また、今後の進化学と生態学の結びつきについて議論した。参加者からも多数の質疑が寄せられ、予定時間を超えた活発な意見交換が行われた。シンポジウムの第二部は、Ecological Research (ER) 編集委員会との共催によるERセミナーとして開催した。第一部と同じくJournal of Applied Ecology (J Appl Ecol) の編集長であるMarc Cadotte教授とその他3人の編集に携わる演者から、生態学に関する世界の論文の動向や学術出版の抱える諸問題、アジアの研究者に向けられる期待に関して話題提供をいただいた。これらの発表を通じて日本の研究者がインパクトの高い生態学の論文を出版するにはどうすればいいのか、また本学会が運営するEcological Researchにアジアの優れた論文をどう集約していくかなど、生態学の学術出版に関わる様々な話題について議論された。

【プログラム】

第一部

森章 (横浜国立大学環境情報研究院) 「趣旨説明」
Marc Cadotte (Department of Biological Sciences, University of Toronto-Scarborough) 「The evolution of ecosystem function」
Richard Shefferson (東京大学総合文化研究科) 「The phylogenetic dimensions of interaction specificity」
辰巳晋一 (横浜国立大学環境情報研究院・学振 PD) 「Inferring community assembly from phylogenetic diversity」

第二部

可知直毅 (日本生態学会理事・副会長) 「挨拶」
Marc Cadotte (Executive editor, Journal of Applied Ecology) 「Achieving and communicating globally relevant research」
岡田慶一 (Copy editor, Ecological Research) 「Ecological Research の 30 年: トレンド変遷とこれからの発展を考える」
Richard Shefferson (Associate editor, Journal of Ecology) 「生態学者と科学雑誌: 最近のトレンド」
森章 (Associate editor, Journal of Applied Ecology, Scientific Reports, and Journal of Forest Research) 「アカデミアにおける多様性と不平等性」
久米篤 (Editor-in-Chief, Ecological Research) 「コメント」

中部地区会

- 平成 28 年度 (2016 年度) 中部地区会大会及び総会を開催
開催日時: 平成 28 年 12 月 4 日 12:00 ~ 17:00 (総会及び大会: 三重大学環境・情報館)。
総会 (12:00 ~ 13:00) の出席者及び主な審議事項は次の通りである。
 - 出席者: 松尾奈緒子・木佐貫博光・鳥丸猛・浅見崇比呂・大塚俊之・吉竹晋平・宮澤裕太郎・戸祭森彦・和田直也 (以上 9 名)
 - 報告事項として、助成金活動が紹介された。今年度は、4 件の応募があり、厳正なる審査の結果、以下に示す 2 件の研究課題が採択された。
 - 「風媒の雌雄異株植物の開花戦略: 開花パターンの性的二型性とそれが生じるメカニズムの解明」松久聖子 (神戸大・院・人間発達環境 D3)
 - 「クスノキ科クロモジ属雌雄異株低木アブラチャン (*Lindera praecox*) とシロモジ (*Lindera triloba*) における送粉者の種間・性差が繁殖成功に及ぼす影響」徳本雄史 (名古屋大・院・客員研究員)
 - 会長の和田直也より、平成 28 年 11 月 28 日現在までの会計報告があった。引き続き平成 29 年度案が示された承された。
 - 大学院生や若手研究者等を対象とした研究助成制度案が示され、次年度も引続き実施することが了承された。「その他注意」の中で、地区大会に参加できない採択者にはウェブでの公開を前提とした報告書の提出を義務付けることにした。
 - 中部地区会費については、次年度も徴収しないことで

意見が一致した。

- ・次年度の中部地区会大会について、事前に了承を得ていた新潟大学佐渡ステーション演習林にて 2017 年 10 月 7 日 ~ 9 日の日程で開催することとなった。
- ・次年度で任期を迎える地区会長について、岐阜大学の 大塚俊之氏が選出され、満場一致で就任が決まった。庶務幹事の選出については、次期地区会長に一任することになった。

総会終了後、研究発表会 (13:15 ~ 17:15) が行われた。参加者は 95 名であり、2 題の口頭発表と 44 題のポスター発表があった。発表プログラムは以下の通りである。

講演会

- 招待講演「紀伊半島の森林とその保全 —三重県下の森林植生に関する事例を中心に—」武田明正 (三重大学名誉教授)
- 招待講演「四日市メガソーラー建設予定地の里山丘陵湿地帯に生息する絶滅危惧動物について」植村明也 (四日市西高校非常勤講師)

ポスター発表会

- 「マングローブにおける葉の被食量の推定」○荒井秀・大塚俊之 (岐阜大)
- 「狭山丘陵における外来種キタリスの多細胞性寄生虫について」叶山泰裕・○荒谷框人 (富山大)・林典子 (森林総研)・酒徳昭宏・横畑泰志 (富山大)
- 「分解速度はリターの多様性によって変化するのか ~ 冷温帯落葉広葉樹林におけるササリターの影響 ~」○浅井千由希・吉竹晋平・大塚俊之 (岐阜大)
- 「Comparative study of dissolved nitrogen concentrations at urban and rural forests in Gifu Prefecture」○ Cao R., Chen S., Yoshitake S., Ohtsuka T. (Gifu Univ.)
- 「The variability in concentrations and fluxes of dissolved organic carbon in water fluxes of a cool-temperate broad-leaved deciduous forest in central Japan」Chen S., Yoshitake S., Ohtsuka T. (Gifu Univ.)
- 「DNA バーコーディング法を用いたアカネズミの植物性餌資源の網羅的推定に必要な個体数の検討」○藤井太一・川本宏和・白子智康・南基泰 (中部大)
- 「松名瀬干潟におけるマキガイイソギンチャクとそれに共生する腹足類の分布特性」○後藤理・木村妙子 (三重大)
- 「豊田市逢妻女川・男川におけるミシシippアカミガメの市民との共働による防除の試み」○浜崎健児・山本大輔・山本敏哉 (豊田市矢作川研)・田村ユカ (名大)・村山恒也 (自然研)・矢部隆 (愛知学泉大)・戸田光彦 (自然研)・早川 匡 (豊田市矢作川研)
- 「シカ・イノシシによる農作物被害のモデル化」早川雄也 (三重大)・山端直人 (三重県農業研)・大野研 (三重大)
- 「アズマモグラのミミズ摂食速度に影響する要因」○氷見公一・鈴木茂信・井出哲哉・岩井美咲子・加茂川千枝・清水智央・吉村和倫・横畑泰志 (富山大)
- 「島嶼環境の違いはリュウキュウマツの幹肥大生

- 長にどう影響するか」○飯島友（千葉大）
- 12) 「近代化産業遺産「愛岐トンネル群」におけるカメラトラップ法で確認された哺乳類相」○金子奈央・藤井太一・南基泰（中部大）
- 13) 「Google の地理空間情報を用いた竹林の健康診断は可能か？」○河合洋人（NPO 法人竹人）・横内茂（名城大）
- 14) 「林床植物イチヤクソウの共生菌への依存度は生育環境（被陰・殺菌剤処理）によって変わるのか」○河合将生（三重大）・谷川東子（森林総研）・松田陽介（三重大）
- 15) 「イノシシの遺伝的組成変化に基づく分集団の拡大プロセス」○城戸咲恵・村瀬香（名市大）
- 16) 「山地渓谷林における樹木の要因別死亡幹と新規加入幹の立木位置の地形的特徴と林冠状態」○木村純也・鳥丸猛・万木豊・木佐貫博光（三重大）
- 17) 「東海地方の海岸クロマツ林内土壌に生息する線虫の群集構造解析」○北上雄大（三重大）・神崎菜摘（森林総研）・松田陽介（三重大）
- 18) 「タイ北部の落葉性チークにおける展葉期の形成層活動」○小西雄登・松尾奈緒子（三重大）吉藤奈津子・高梨聡・藤原健（森林総研）・田中延亮（東大）・五十嵐康記（名大）・Chatchai Tantasirin（カセツアート大）
- 19) 「金華山常緑広葉樹林における土壌呼吸量の空間変動」○國枝秀・大塚俊之（岐阜大）
- 20) 「風媒・風散布の雌雄異株植物スイバの花序構造：性的二型性とメスのジレンマ」○松久聖子・丑丸敦史（神戸大）
- 21) 「カタツムリ専食へびにおける捕食行動の多様性」○宮澤裕太郎・浅見崇比呂（信州大）
- 22) 「三重県鳥羽市菅島および日本各地のイブキジャコウソウの形態比較」○水野隆文・中原悠介・畑中良規・藤森朝章・安井暲（三重大）
- 23) 「Subpopulation dynamics and habitat preference of wild boar revealed by statistical modeling using population genetics and space-time information」○Murase K., Kido S. (Nagoya City Univ.)
- 24) 「雌雄異株性常緑低木ヒメモチのパッチの開花割合および開花幹の性比と土壌のリン・窒素量の関係」○二宮健介・鳥丸猛（三重大）
- 25) 「タイ北部の落葉性チークの乾季における光合成能力の低下」○落合拓朗・松尾奈緒子（三重大）・吉藤奈津子（森林総研）・田中延亮（東大）・鎌倉真依（京大）・チャチャイ・タンタシリン（カセツアート大）・田中克典（海洋研究開発機構）
- 26) 「静岡県の小中学校におけるカメ類の飼育の現状とニホンイシガメの域外保全の試み」○小田晃希・宮下滉平・山下祐輝・酒井 泉・加藤英明（静岡大）
- 27) 「雌雄異株性低木ヒメアオキの性特異的ゲノム領域の探索と性識別遺伝マーカーの開発」○大場将平（三重大）・赤田辰治（弘前大）・永松大（鳥取大）・鳥丸猛（三重大）
- 28) 「衰退した大台ヶ原における生残木の水分生理：樹幹剥皮がトウヒの樹液流速に及ぼす影響」○岡本榛名（三重大）・齋藤隆実・五十嵐康記・熊谷朝臣（名大）・鳥丸猛・木佐貫博光（三重大）
- 29) 「High density causes host alternation in an invasive herbivore, *Corythuca maarmorata*」堀田賢志・○Vina Rizkawati・塚田森生（三重大）
- 30) 「静岡県に生息するニホンアカガエルの生息の現状と DNA 多型」○酒井泉（静岡大）・守屋司子・栗山由佳子（麻機自然再生協議会委員）・加藤英明（静岡大）
- 31) 「ブナ科数樹種の堅果の性質や状態が散布後種子食昆虫の堅果侵入に及ぼす影響」○澤山りりん・鳥丸猛・木佐貫博光（三重大）
- 32) 「絶滅危惧種ハクセンシオマネキの三重県における分布の現状」○島田英樹・木村妙子（三重大）
- 33) 「福島県産アズマモグラにおける胸部淡色斑の出現と肺の放射性セシウム濃度」○清水智央・武田沙千愛・白川貴之・加茂川千枝・廣上清一・丸茂克美・横畑泰志（富山大）
- 34) 「ミナミイシガメの遺伝子汚染の現状と交雑個体の検出」白川真衣・村瀬涼介・加藤英明（静岡大）
- 35) 「静岡県に生息するニホンアカガエルの生息の現状と DNA 多型」○酒井泉（静岡大）・守屋司子・栗山由佳子（麻機自然再生協議会委員）・加藤英明（静岡大）
- 36) 「森林斜面上の異なる位置に生育するヒノキのアーバスキュラー菌根菌感染率の比較」○杉本恵理・大石有美・松尾奈緒子・喜多見晃平・松田陽介（三重大）・勝山正則・鶴田健二・小杉賢一朗・小杉緑子（京大）
- 37) 「北アルプス太郎山におけるニホンライチョウの糞中植物残渣からの餌資源推定」○鈴木雄祐・鈴木景子・藤井太一・上野薫・南基泰（中部大）
- 38) 「開花時期の異なるクスノキ科クロモジ属 2 種の訪花昆虫と繁殖成功」○徳本雄史（名大・基生研）・松下通也（森林総研）・岸本圭子（新潟大）・五十君友宏・中川弥智子（名大）
- 39) 「岩礁潮間帯のヤドカリ群集に対する海洋酸性化の影響」○戸祭森彦・今孝悦（筑波大）・下田臨海実験センター）
- 40) 「近代化産業遺産「愛岐トンネル群」におけるアカネズミ、ヒメネズミの遺伝的多様性」○山田晴裕・勝彪太・藤井太一・南基泰（中部大）
- 41) 「DNA バーコーディング法を用いた山中湖周辺におけるハチミツの蜜源植物推定」○山川佳琳・藤井太一・南基泰（中部大）・白子智康・田中真規子（いであ株式会社）
- 42) 「中間温帯林（段戸山）の森林構造とスズタケの一斉開花」○依田浩輝・中川弥智子（名大）
- 43) 「太さの異なる人工トンネルのモグラ 2 種による使用頻度の比較」○吉村和倫・清水智央・鈴木茂信・氷見公一・横畑泰志（富山大）
- 44) 「Diurnal variation of dissolved inorganic carbon (DIC) with tidal cycling in a mangrove forest in Ishigaki Island, southern Japan」Zheng S., Yoshitake S. (Gifu Univ.),

Tomotsune M. (Kobe Univ.), Onishi T. (Gifu Univ.),
Kondo M. (NIES), Ohtsuka T. (Gifu Univ.)

ポスター賞に応募のあった35名中、次に示す5名が「優秀ポスター賞」に選ばれ、表彰が行われた。

浅井千由希 (岐阜大学大学院応用生物科学研究科)

河合将生 (三重大学生物資源学部)

澤山りりん (三重大学生物資源学部)

戸祭森彦 (筑波大学大学院生命環境科学研究科)

宮澤裕太郎 (信州大学大学院総合理工学研究科)

近畿地区会

(1) 2016年度第1回地区会委員会

日時：2016年12月17日(土)

会場：大阪会館(大阪市中央区)

議事：1) 2016-2017年地区委員および事務局の紹介、
2) 2015年度決算報告、2016年度事業計画および同・
会計中間報告、3) 2017年度事業計画および同・会
計予算案、4) 2017-2018年度自然保護専門委員の
承認、5) 亀岡市アユモドキ問題に関する京都府・
亀岡市への他団体との共同意見書の提出について、
6) 2019年度日本生態学会全国大会の近畿地区での
持ち回り担当について、7) その他

(2) 2016年度近畿地区会総会

日時：2016年12月17日(土)

会場：大阪会館(大阪市中央区)

議事：1) 2016年度事業計画および同・会計中間報告、
2) 2017年度事業計画および同・会計予算案につい
て、3) 亀岡市アユモドキ問題に関する京都府・
亀岡市への他団体との共同意見書の提出、4) その他

(3) 2016年度第1回例会

日時：2016年12月17日(土)

会場：大阪会館(大阪市中央区)

第20回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式(横
山大稀、樋口裕美子、安岡法子の3名に奨励賞を授
与した、代表者のみ記載)

一般発表

- 1) 「ミヤマアカネはなぜ減少しているのか～幼虫と成虫の特異な生息環境の解明～」東川航(神戸大院・農)・吉村真由美(森林総研・関西)・八木剛(人と自然の博物館)・前藤薫(神戸大院・農)
- 2) 「個体群動態と繁殖フェノロジーからみたキタキチョウの季節型の混棲現象」小長谷達郎(京大院・理)・内海邑(総研大院・生命共生体進化)
- 3) 「生理特性から探る広塩性スミウキゴリの塩分環境利用を規定する要因」大戸夢木(京大院・理)
- 4) 「水田の空間統計分析によるニホンアカガエルの産卵場所と農地管理の関係」浅野悟史(総合地球環境学研究所)・脇田健一(龍谷大)・西前出(京大)・奥田昇(総合地球環境学研究所)
- 5) 「捕食者が増えると捕食効率が高まる? : アカハライモリ-オタマジャクシの捕食-被食関係での検証」松尾寛(神戸大院・理)・立木佑弥(京大・ウイルス研)・岸田治(北大・FSC)・佐藤拓哉(神戸大院・理)

6) 「シロアリの単為生殖を利用した複雑な繁殖システムの進化を探る」野崎友成・矢代敏久・松浦健二(京大院・農)

7) 「単為生殖できるシロアリが性を維持する理由」藤田忠英・松浦健二(京大院・農)

8) 「ヤマトシロアリの腸内微生物群集にみられる性差」稲垣辰哉・松浦健二(京大院・農)

9) 「被子植物における新たな送粉シンドローム：送粉者としての微小双翅目昆虫の有用性と一般性について」望月昂・川北篤(京大・生態学研究セ)

10) 「送粉者の機能群組成の違いが送粉ネットワークに与える影響：本土と海洋島の比較」平岩将良・丑丸敦史(神戸大・人間発達環境)

11) 「シカによる長期の被食圧が森林の更新能力に与える影響」曳地穂・神崎護(京大院・農)・前迫ゆり(大阪産業大学院・人間環境)・長谷川博幸(京大院・農)

12) 「縞枯林に未来はあるか?—弥山シラビソ林の変動とニホンジカの食性—」深川幹(奈良教育大院)・松井淳(奈良教育大)・辻野亮(奈良教育大・自然環境教育セ)

中国四国地区会

(1) 第60回中国四国地区大会(2016年5月14,15日,於:
米子コンベンションセンター「ビッグシップ」)

【ポスター発表】(5月14日)

「美郷のホタル及びその発生地と保存管理計画の基盤づくり」○藤宗朋樹(徳島大・院・先端技術科学)「鳥取砂丘におけるエリザハンミョウの個体数推定」○鶴崎展巨, 岡田勲, 杵野高也, 深澤豊武, 湯本祥平(鳥取大・地域)

「高知県におけるイラガセイボウ(ハチ目セイボウ科)の生態学的研究」○*松岡旦, 島崎祐樹, 伊藤桂, 福田達哉, 荒川良(高知大・院・総合人間自然科学)「山陰海岸ジオパークエリア内における海浜性ウスバカゲロウ類の分布」○中山桂, 井上健人, 柏木峻秀, 板井竜二郎, 鶴崎展巨(鳥取大・地域)

「日本海岸に出現したアカウミガメの遺伝的多様性」○*藤濱朋哉¹, 田中智美², 荒西太士^{1,2}(¹鳥根大・院・生物資源科学, ²鳥根大・汽水研)

「ミナミアカヒレタビラ *Acheilognathus tabira jordani* の生息環境と季節移動」○鴛海智佳^{1,2}, 古林敏彦², 國井秀伸³(¹鳥取大連合農学・生物環境, ²ミナミアカヒレタビラ研究会, ³鳥根大・汽水域研究センター)

「四国沿岸における干潟生物相調査」○三浦誠矢, 森小菊, 福田達哉, 伊谷行, 中井静子, 三浦収(高知大・院・総合人間自然科学)

「制裁が存在する相利共生の維持機構」○山口眞作(鳥根大・院・生物資源科学)

「共生性ハゼ類ヒモハゼ及びチクゼンハゼによる宿主特異性：野外調査と室内実験による検証」○邊見由美¹, 乾隆帝², 伊谷行¹(¹高知大・院・黒潮圏総合科学, ²山口大・院・理工)

「鳥取市内陸部及び岩美町における絶滅危惧種ワカサハマギクの個体群の現状」○中元崇博¹, 永松大², 中田政司³ (1 鳥取県立岩美高等学校, 2 鳥取大・地域・地域環境, 3 富山県中央植物園)

「スイカズラ科コックバネウツギの送粉生態学的研究」○* 藤本悠, 桑川義雅, 伊藤桂, 荒川良, 福田達哉 (高知大・院・総合人間自然科学)

「公園における人の踏み付けと植生の関係」森山舞奈¹, 太田 謙², ○波田善夫¹ (1 岡山理大・生地, 2 岡山理大・自然植物園)

「鳥取砂丘に生育する海浜植物5種の分布特性」○* 岩里実季, 永松大 (鳥取大・院・地域)

「広島県宮島の雑草フロラ (予報)」恵良友三郎¹, 井上侑哉², 武内一恵³, 中原・坪田美保⁴, 向井誠二⁵, ○坪田博美² (1 広島大・理, 2 広島大・院・理, 3 広島市佐伯区, 4 千葉中央博・共同研究員, 5 廿日市市)

「北海道における希少猛禽類オジロワシの生息域推定と風力発電施設適地の関係性解析」○* 林佑亮¹, 河口洋一¹, 竹川有哉¹, 赤坂卓美², 中川元³ (1 徳島大・院・先端技術科学, 2 帯広畜産大学, 3 オジロワシ・オオワシ合同調査グループ)

「四国山地三嶺山域さおりが原の防鹿柵によって保護された林床植生の回復過程」○石川慎吾, 渡津友博, 久住稔, 森本梓紗, 高野美波, 浅野諒也, 比嘉基紀 (高知大・理)

「タンポポ生育地の植生 - 植生の季節変化と管理形態の関係 -」○上赤菜都美¹, 太田謙², 波田善夫¹ (1 岡山理大・生地, 2 岡山理大・自然植物園)

「根の土壌貫入能力は硬化土壌における植物成長の指標となるか?」白川諭, ○衣笠利彦 (鳥取大・農)

「河川砂礫堆上の植物群落の組成と構成種の種特性の関係」○* 築地孝典¹, 比嘉基紀², 石川慎吾² (1 高知大・院・理, 2 高知大・理)

「旭川下流域の河原植生 施工後2年目におけるオオブタクサ群落の消長」○太田謙¹, 上赤菜都美², 波田善夫², 千野貴彦³ (1 岡山理大・自然植物園, 2 岡山理大・生物地球, 3 岡山河川事務所)

「メキシコ南バハカリフォルニア州における *Pinus lagunae* の更新様式」○山崎友哉, 佐野淳之 (鳥取大・森林生態系管理)

「鯉ヶ窪湿原を中心とした湿原植物の C/N 比の基礎的研究」○林広祥¹, 太田謙², 波田善夫³ (1 岡山理大・院・生物地球, 2 岡山理大・自然植物園, 3 岡山理大・生物地球・生物地球)

「四国沿岸域における GIS を用いたアマモ類3種の生育適地推定」○中河哲郎¹, 竹川雄哉¹, 乾隆帝², 河口洋一³ (1 徳島大・院・先端技術科学, 2 山口大・院・理工学, 3 徳島大学 STS)

「集落に残存するカキ在来品種“新平柿”と土地利用変化」○富森加耶子, 永松大 (鳥取大・院・地域)

【口頭発表】(5月15日)

「マクロスケールにおける日本産ワラジムシ類の分布制限要因の推定」○唐沢重考¹, 中田兼介² (1 鳥

取大・地域, 2 京都女子大)

「鳥取県におけるブナ科堅果類5年間の豊凶変動とクマの出没傾向」加藤史恵, ○永松大 (鳥取大・地域)

「高知県における狩猟者人口の動態と狩猟圧の空間分布」○比嘉基紀, 竹村実佐子, 石川慎吾 (高知大・理)

「ヒノキ人工林における雄花・球果生産量に影響を及ぼす要因」○稲垣善之¹, 倉本恵生², 中西麻美³, 深田英久⁴ (1 森林総研四国, 2 森林総研, 3 京大, 4 高知県森林技術センター)

「徳島県海陽町大里における海岸マツ林の自律的管理」○朝波史香, 佐々木剛, 藤永真人, 吉川貴之, 鎌田磨人 (徳島大・院・先端技術科学)

「溪流生態系への餌資源供給と土砂流出に対する森林植生の影響範囲」○井上幹生, 菊地修吾, 竹林佑記 (愛媛大・院・理工)

【高校生研究発表】(5月14日)

【公開講演会】(5月14日)

中国地方の希少動植物とその保全

(コーディネーター: 鶴崎展巨 (鳥取大学))

「国内で野外絶滅に近づいたウスイロヒョウモンモドキの緊急性と、対策に向けた課題」永幡嘉之 (自然写真家・日本チョウ類保全協会)

「岡山県蒜山地域の火入れ草原における種多様性」佐野淳之 (鳥取大学農学部)

「鳥取県の希少野生植物とその保全に向けた取り組み」永松大 (鳥取大学地域学部)

【総会】(5月15日)

a. 報告事項

庶務報告

学会誌発行部数、地区会員の動向 (2015年12月末現在 275名、昨年度と同数)、会費納入率、活動報告について

地区選出委員 (地区代議員、自然保護委員、生態系管理専門委員) から報告

優秀発表賞表彰規定について

b. 審議事項

1) 2015年度会計決算案

・大田会計幹事から説明があり、承認された。

2) 2016年度会計予算案

・大田会計幹事から説明があり、米子大会のポスター賞副賞費として1万円が、役員会会費費として県幹事で博物館勤務の方 (固定の旅費が限られている) の旅費5万円の予算が追加され、承認された。また、地区会のHP管理費として5万円 (外部委託)、将来検討会の予算15万円当てる事が提案され、承認された。

3) 2017年度合同支部大会開催地: 高知

4) 2018年度合同支部大会開催地: 山口 (2019年度、広島)

5) 日本生態学会中国四国地区会のあり方について

・各県の県幹事が中心になり、県内の会員に向けてメールによる情報発信や情報収集を行うことが提案され、承認された。

九州地区会

(1) 2015 年度地区委員会

2015 年 5 月 23 日 (土) 福岡大学

(2) 地区大会

第 60 回三学会九州支部・地区合同大会

会期：2015 年 5 月 23 日 (土) ~ 24 日 (日)

会場：福岡大学

【生態学会員による口頭発表】

「クモハゼの精子競争 —スニーカー雄の父性獲得に影響する要因—」○金谷洋佑・川瀬翔馬 (長崎大・院水環)・佐藤成祥 (Aberystwyth Univ. IBERS)・竹垣毅 (長崎大・院水環)

「クモハゼの雄はなぜ他の雄の卵保護を引き継ぐのか？」○永瀬翔一・川瀬翔馬 (長崎大・院水環)・佐藤成祥 (Aberystwyth Univ. IBERS)・竹垣毅 (長崎大・院水環)

「北部九州におけるカササギの分布拡大と営巣数の変遷」○江口和洋 (九大院・理・生物：現国東市)

「掘削した代替横坑におけるコキクガシラコウモリの利用」○藤井暁彦・林田創 (九環協)・荒井秋晴 (九歯大・総合教育)・中川順野・上本耕輔 (福岡県伊良原ダム建設事務所)

「ハサミモデルを使ったチゴガニの waving 機能の解析」○河野容子 (熊本大・院・自然)・逸見泰久 (熊本大・沿岸域センター)

「百見は一行にしかず? : マルハナバチの花選びにおける観察と経験の影響」○崎田愛音 (九大院・システム生命)・川口利奈 (兵庫県大・自然環境研)・大橋一晴 (筑波大・生命)・粕谷英一 (九大・理・生物)

「新燃岳 2011 年噴火は特異な植生変化をもたらすか？」○安部哲人・山川博美 (森林総研・九州)

「福岡県筑後地域における特定外来生物ブラジルチドメグサの分布拡大」○須田隆一・金子洋平・石間妙子・中島淳 (福岡県保環研)

(3) 地区例会

第 526 回 5 月 30 日 (土) 沖縄 (沖縄国際大学)

沖縄生物学会大会公開シンポジウムとして開催しました。 <http://www.okibio.jp/active/>

第 527 回 7 月 11 日 (土) 鹿児島 (鹿児島大学理学部)

生態学会からの話題提供はありませんでした。

第 528 回 11 月 7 日 (土) 宮崎 (宮崎大学農学部附属フィールドセンター)

「樹洞と関連した熱帯泥炭湿地林の樹木の成長」門田有佳子 (宮崎大学農学部)

「小型哺乳類の日内休眠について」森田哲夫 (宮崎大学農学部)

第 529 回 11 月 14 日 (土) 佐賀 (佐賀大学農学部)

「オオイヌタデにおけるトリコム生産が植物のパフォーマンスと植食者群集に及ぼす影響」白濱祥平 (佐賀大学農学部)

「光合成をやめた植物「菌従属栄養植物」の進化と菌根共生」辻田有紀 (佐賀大学農学部)

「生物界に普遍的な機構の一つである DNA 修復について」寺東宏明 (佐賀大学総合分析実験センター)

第 530 回 11 月 14 日 (土) 熊本 (熊本大学理学部)

「Characterization of the superoxide dismutase isozymes of the halophyte *Suaeda maritima* in Japan and Egypt」(日本及びエジプト産の塩生植物ハママツナにおけるスーパーオキシドジスムターゼイソ酵素の特徴) Elsayed Mohamed (Faculty of Science, Al-Azhar University, Egypt)

「酵母ミトコンドリア内膜呼吸鎖複合体形成における AAA 分子シャペロン Bcs1 の機能解析」澤村理英 (熊本大学大学院自然科学研究科)

「熊本県における特定外来生物クリハラリスの防除の記録」安田雅俊 (森林総合研究所九州支所)

第 531 回 12 月 5 日 (土) 鹿児島 (鹿児島大学理学部)

【特別講演】

「奄美の自然～なぜ世界自然遺産候補地なのか～」宮本句子 (鹿児島大学学術研究院理工学域理学系)

【高校生による研究発表】

「南日本における港のアリの地域間比較～外来アリのモニタリング～」学校法人池田学園池田高等学校 SSH 課題研究生物班② 櫻井愛弓・新有留茜・中村美月・若松良衣 (指導：原田豊)

「“屋久島方言”で鳴くツクツクボウシの正体を探る!～大隅諸島の昆虫相に今も残る幸屋火砕流の爪痕?～」鹿児島県立国分高等学校サイエンス部 2 年昆虫班 有村笑・遠藤あかり・大瀧雄太・片平丈己・古賀葵・永田征也・中村瑠磨・本田智也 (指導：小溝克己)

第 532 回 12 月 5 日 (土) 福岡 (九州大学理学部)

「被子植物と裸子植物の光合成機能の違い」○津山孝人 (九大農)、Radka Vladkova (Institute of Biophysics and Biomedical Engineering, Bulgarian Academy of Sciences)

「ショウジョウバエ概日リズムの制御メカニズム」伊藤太一 (九州大学理学部)

「性的対立という悲劇、カメムシのメスはなぜ死んだか？」日室千尋 (九州大学理学部)

第 533 回 12 月 12 日 (土) 長崎 (長崎大学水産学部)

「潮間帯干潟域におけるアカエイの摂餌場利用パターンにみられる経日変化 —ドローンを使用した連日空撮調査手法の適用—」○竹内清治・玉置昭夫 (長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科)

「イミダクロプリドおよびクロチアニジンがチゴガニのウェービング行動に及ぼす影響」○吉濱海斗 (長崎大学環境科学部)・廣瀬陽・岡田二郎 (長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科)・藤崎顕彰・内田誠一 (九州大学大学院システム情報科学研究院)

「新しい海藻養殖の課題と現状」桑野和可 (長崎大学水産学部)

「体外受精種における雄の強制配偶の検証 —ロウソクギンポを例に—」松本有記雄 (水産総合研究センター東北水産研究所)○竹垣毅 (長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科)

第 534 回 12 月 19 日 (土) 大分 (大分大学教育福祉科学部)

「タケノコカワニナにおける泥質と成長の関係」○石川真太郎・永野昌博（大分大学教育福祉科学部）
 「大分県のコケ類 - 希少種の生育の状況その2 -」大塚政雄（日本蘚苔類学会）
 「大分県の食用藻類」伊藤龍星（大分県農林水産研究指導センター水産研究部）
 「豊後大野市が考える地域づくり～ジオ・エコ・生物多様性戦略の役割～」神志那庸一（豊後大野市役所商工観光課）
 「大分県内で見られたクラゲ類」岩井美菜（大分マリーンパレス水族館「うみたまご」）
 「オオイタサンショウウオの環境による育ち方の違い」甲斐潤樹（大分市立日岡小学校）
 「大分県内湧水の水質と味覚」炭本悟朗（NPO 法人おおいた生物多様性保全センター）
 「有害赤潮プランクトン *Karenia mikimotoi* の生態とその対応策」宮村和宏（大分県農林水産研究指導センター水産研究部）・野田誠（大分県東部振興局農山漁村振興部）・○景平真明（大分県東部振興局農山漁村振興部）
 「魚類相調査に基づく環境教育プログラムの開発」○大山実花・永野昌博（大分大学教育福祉科学部）
 「大分県北部におけるクマタカの記録」三丸祥子（NPO 法人希少生物研究会）
 「草原性希少チョウ類の保全活動について」朝倉和紀（九重ふるさと自然学校）
 「大分からはじまった九州の環境教育プラットフォーム」澤克彦（九州環境教育ミーティング）
 「アカメガシワの防御戦略の研究」○衛藤大知・○伊東美依・○管捷吾・○壺内聡太（大分県立大分鶴崎高等学校科学同好会）

(4) 地区会報 68、69 号発行

書 評

Eric S. Loker, Bruce V. Hofkin (2015) 「Parasitology: a conceptual approach」Garland Science 550pp. ISBN: 9780815344735

寄生虫生態学を志す学生にとって「待望の教科書」と言ってよいだろう。本書の中心的テーマは寄生虫の生態学および進化生物学である。全 10 章の構成は「イントロダクション」「生物多様性」「感染の生物学」「免疫」「病理（宿主の行動変化を含む）」「生態」「進化生物学」「保全生物学」「コントロール」「展望」となっている。

現行の寄生虫学の教科書の多くは、多様な分類群の形態や生活史、生物学的特性の記載に多くのページを費やしている。寄生虫の生活史や生理の驚くべき多様性はそれだけでも興味深いとは言え、一般的な生態学的課題に関心のある人にとっては高い壁と感じられることも多いだろう。もちろん、生態学的観点からの寄生虫学本は今までもあり、たとえば Poulin, R. (2007) *Evolutionary Ecology of Parasites* (Princeton University Press) は、徹底

的に数値データを用い、群集構造やニッチ（寄生虫の場合は宿主特異性や寄生部位特異性として扱われる）などの生態学の基本的概念に寄生虫を載せた著書である。生態学から勉強を始めた人にとってはこのような本が取りつきやすいかもしれない。しかし、このようなアプローチは理解しやすい反面、自由生活者には見られない、寄生虫ならではの生理的特性や多様性をほとんどすべて切り捨ててしまっている。また、寄生に関する書籍は、広い分類群をカバーするために多数の著者による共著となることが少なくないが、著者ごとに専門性が違うため、そのような本はえてして各章の視点や用語が一貫せず、一冊を通読することが困難になる。医学・獣医寄生虫学に偏っている日本ではそれが特に顕著で、「寄生と共生」（石橋信義・名和行文編、東海大学出版会、2008）、「感染症の生態学」（日本生態学会編、共立出版、2016）も、残念ながらその轍を踏んでしまっており、正直に言って読みづらい。

本書は目次のとおり、各章は特定の生物学的概念について寄生虫の分類群とは関係なく記述され、一般読者が寄生虫学のテキストを読む上で大きな障害となる分類群ごとの解説は巻末に Gallery としてまとめられている。また本書は「寄生生物の生態と進化」というコンセプトを貫きながら、寄生虫独自の多様で複雑なバイオロジーや、精選された医学研究成果も数多く取り上げており、大変広い範囲をカバーしながらバランスのとれた希有な教科書である。人畜寄生虫は、医学的観点から生理や免疫応答について深く研究されているが、その中には新たな生態学研究の種となりそうな事象も豊富に含まれており、著者はそれらを丁寧に拾い上げている（第一著者の Loker は、免疫系を介した宿主—寄生者関係の専門家である）。面白い例を二、三挙げれば、人体寄生虫である回虫 (*Ascaris suum*) が宿主の構成分子を擬態するペプチドを生産して免疫系の攻撃を逃れていること (P119) は、分子レベルでの擬態の存在を示しているし、社会性昆虫がコロニーメンバー間の接触により軽度の菌類感染を経験し、それによって強い免疫を獲得する社会性免疫 (P121) は、対寄生者戦略としてワクチン接種が自然界にも存在することを暗示し、生物が集団生活をいとむことの一つの利点を示していると言えよう。本書は寄生生物の生態を知りたい人に役に立つだけでなく、新たな生態学研究のアイデアを探している人にとっても、たくさんヒントが埋まっている面白い本として読むことができるだろう。さらに、著者 Loker と Hofkin は同じ大学で長年共同研究をしている同僚であり、そのためか本書は章ごとに視点や用語、文体が変わることがなく、非常に読みやすい。

残念ながら、日本では現在、一般生物学を勉強する大学生に勧められるまともな寄生虫学の教科書は存在しない。日本で出版されている寄生虫学の教科書は、ほとんどが臨床を担当する医師や獣医師向けであり、診断や治療に重点が置かれている。その一方で、寄生虫の分類や生活史情報については古い間違っただけの情報そのまま踏襲され、近年の研究の進展が反映されていない場合も少なくない（たとえば石井俊雄著・今井壯一編「改訂 獣医

寄生虫学・寄生虫病学 1・2) (講談社サイエンティフィック、2007)における分類体系を見よ)。寄生虫の生態を研究する学部生および大学院生には、本書を必読書として推薦する。それ以外にも、本書は寄生に関する興味深い生態学的知見を概観するには絶好の良書なので(テキストの分量もお手頃である)、寄生現象にわずかでも関係のある研究をしている方にはぜひ一読を勧めたい。

(滋賀県立大学環境科学部 浦部美佐子)

中村徹編著 (2015)「森林学への招待 増補改訂版」
筑波大学出版会 170pp. ISBN: 978-4-904074-36-7
定価 2200 円+税

本書は私も所属する筑波大の初年次生向け総合科目「森林」の講義録をもとにしている。「総合科目」は全学の学生が教養として選択履修する。従って本書の読者は、一定水準の高校・大学初年次教育を受けてはいるものの、生物学・農学等を必ずしも専攻しない一般の若者、ということになる。ちなみに評者はこの科目には関与していない。

本書「まえがき」でも述べられているように「森林学」の対象は広い。従って、広い読者層を惹きつける話題には事欠かない。実際、本書は各分野の第一線の専門家を分担者に揃えて、生物学から気候学、経済学、文学、芸術にまで話題を広げている。読者はこのうちのどれかにひっかかって森林に興味を持ち、そこから様々な学問に興味を広げる。これが本書の作戦、いわば「森林を軸にした教養教育」なのだろう。

例えば、数学における世紀の難問と言われた「ポアンカレ予想」を解いたロシアの数学者ペレルマンが、巨額の懸賞金と数学界最高栄誉のフィールズ賞を辞退して森の中の静謐な生活を好んだ、という部分を数学類(他大学でいうところの数学科)の学生が読めば、自分も森の中で数学をやってみようかという気分にもなる。スギ科・ヒノキ科ではミトコンドリア DNA が母性でなく父性遺伝する、そしてそれは筑波大の学者が発見した、という部分を生物学類生が読めば、生物学への一層の興味と母校への誇りが湧くだろう。体育学類のスキーヤーが本書で森林とスキー場の関係を読めば、自分の競技環境の背景を考えるきっかけになるだろう。

一方で評者は、本書を含む、多くの「森林入門書」に共通する根本的な問題をここで論じたい。それは、読者が「登場人物」をイメージできない、というものである。要するに、専門家以外の人々は、ほとんどの木について「名前と顔が一致しない」のだ。例えば、本書に登場する、スギ、ヒノキ、ツバキ、コナラ、ブナ、カラマツ、スタジイ、ダケカンバ、コメツガ、タブノキ、シラビソ、...といった樹種について、それらの名前から実際の木を想像できる読者はどれだけいるだろう? 私自身、実習や調査で野外に学生を連れて行くが、スギとヒノキを区別できる学生は珍しい。それらが常緑樹・針葉樹であることも知らない学生もいる。そのような状態で森林に関する入門書を読むのは、登場人物のことをわからずに小説を読むのに等しく、どんな面白い話も「感情移入」でき

ないのではなからうか?

もっとも、このような問題は、編著者の中村徹・筑波大学名誉教授は百もご承知である。中村先生は、長年、筑波大学生物資源学類の3年生対象の専門科目「森林植物学」を担当され、その中で毎回、筑波大のキャンパスを学生とともに歩きまわって実際に木を見せ手にとらせ、その名前と特徴を教えておられる。私は衛星リモートセンシングが専門なので、観測対象である森林のことも学生に少しはわかって欲しいし、自分も勉強したい。そこで昨年、この名物講義に潜ることにした。講義の詳細は企業秘密に触れるので割愛するが(知りたい方は、ぜひご自身で潜ってみることをおすすめする。開講日時などは筑波大学のホームページのシラバスに載っている)、中村先生の「植物愛」が溢れ出て学生に流れこむ素晴らしい講義であった。ちなみに中村先生は私の「潜り」を歓迎して下さり、「奈佐原さんもちゃんと期末試験を受けるんだよ」と逃げ道を塞いで下さった(お返しに私は「学生による授業評価アンケート」もちゃんと書かせて頂いた)。

私はこの体験は教養教育に不可欠であると考え、中村先生にお願いして、今年、生物資源学類1年生対象の夏の野外実習の一環として、筑波実験植物園で同様のツアーをやって頂いた。学生によるレポートでは、「今まで何も知らず何も考えずに自然の中を歩いていたことに気付いた」「普段自分が目にしていない樹木が常緑樹なのか落葉樹なのかなど考えたこともなかった」「日本に生息する木の名前や特徴を知らなかったことに気づかされた」「知識を持つだけでこんなにも見え方が変わるものなのかと感動した」「木に興味はなかったのに、わくわくしている自分がいて驚いた」「高校の生物や地理で植生分布について聞いたが、実際にはこれほど林相が違うのかと驚いた」「植物から見えることがこんなにも多いのかと驚き続けた。森を見ればその地の気候や標高、気温が見え、各樹種に着目すればその地の生態系だけでなく、人々の暮らしや文化までも見えてくる」「見た目はあまり違わないのに、葉を触るとエゾマツはトゲが痛い、トドマツは痛くなかった。触ってみることでわかることもあると気付いた」などの感想があった。本書の読者には、このような体験とセットで本書を読むことを期待したい。そのためにも、本書が将来再び改訂される暁には、

若干の値上げを伴ってでも、「中村徹先生による植物園解説ツアーチケット」が巻末に添付されることを期待したい。

(筑波大学生命環境系 奈佐原顕郎)

大園享司著 (2015)「カナディアンロッキー：山岳生態学のすすめ」 京都大学出版会 311pp. ISBN: 978-4876988716 定価 2484 円 (税込)

本書はカナディアンロッキーの自然について網羅的に解説したものである。しかし、副題に示されているように、著者のねらいはそこにとどまらず、カナディアンロッキーという場所を素材として、山岳生態系の一般的な

ダイナミクスを解説しようという点にある。「はじめに」では、「生態学の基礎と応用を実地で体得する上で、カナディアンロッキーは絶好のモデルケースとなる」とも述べられている。そのような一般性を意識し、本書は5つの視点からカナディアンロッキーの自然をとらえている。それはそのまま本書の章立てに反映され、第1章の序章「自然環境」を除いた残りの5章が、そのまま5つの視点を表している。すなわち、第2章「植生とその変遷」、第3章「生態系の遷移」、第4章「生態系の物質循環」、第5章「土壌生物の働き」、第6章「人間活動と野生動物・生態系の保全」である。

第4～5章の内容が著者の専門に一番近いと思うのだが、ページ数は(第1章以外は)他章の方が多く、専門外の分野についても英語の書籍や文献を多数収集し読みこなしした上で、バランスよくまとめようとしたことが伺われる。そんなわけで、本書によれば、カナディアンロッキーについて行われてきた多数の生態学的研究の全体像を日本語で容易に把握でき、たいへん便利である。広大なカナダあるいはロッキー山脈全体からすれば狭い(といってもおそらく日本と同じぐらい広い? 地図に緯度が示されていないことがあり、どれぐらい広いのかわかりにくい)カナディアンロッキーだけでもこんなにも膨大な研究の蓄積があることには驚かされた。

ただし、カナディアンロッキーが山岳生態系の一般的なモデルとして適切かどうかは、とりわけ読者として想定される日本人にとっては判断が難しいところだと思う。まず、カナディアンロッキーはアメリカ合衆国東部のほぼ南端(北緯32度)にまでおよぶロッキー山脈の中では一番北の端であり、北緯49度より北にある。これは北海道の北端(北緯45.5度)より北である。したがって、中～低緯度山岳のモデルにはなりえず、高緯度山岳と限定すべきであろう。さらにカナディアンロッキーを含む北アメリカ西部は北半球にありながら、東アジア・ヨーロッパ・北アメリカ東部とは違って、気候に対応した落葉広葉樹林帯を欠く特殊な場所である(ただし、カナディアンロッキーの低標高の溪流沿いにはアメリカヤマナラシ林がある)。このこと自体が本書では指摘されず、その理由の考察もなく、いきなりカナディアンロッキーの植生の詳しい説明が始まるので、北アメリカ西部の植生をよく知らない読者は戸惑うかもしれない。さらに、カナディアンロッキーの生態系では、日本では考えられないほど森林火災をはじめとした攪乱の影響が大きい。このことは第3章で詳しく解説されるが、北アメリカやオーストラリアなど乾燥の卓越する大陸性気候では火災が最も重要な攪乱要因の一つなのである。その意味では、火災が少ない日本の生態系の方がむしろ例外的なのかもしれない。

そういうわけで、本書は山岳生態系のダイナミクスの一般的解説にはなりえていないかもしれないが、それが本書の価値を損ねているわけではない。カナディアンロッキーという特定の場所、あるいは火災が大きな影響をもつ高緯度山岳生態系の解説としては大変すぐれており、特にそのような場所を実際に訪れたことのない読者

(評者もそのひとり)にとっては、目から鱗が落ちるような読書体験になるかもしれない。

(鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎)

徳田誠著 (2016)「植物をたくみに操る虫たち：虫こぶ形成昆虫の魅力」277p. 東海大学出版部 ISBN:978-4486020974 定価 2000 円+税

本書は、東海大学出版部の「フィールドの生物学」シリーズとして発行されたもので、同シリーズの他の本と同じく、自然史研究の楽しさが詰まった1冊である。「植物をたくみに操る虫たち：虫こぶ形成昆虫の魅力」という題名の通り、著者である徳田さんが扱うメインの研究材料は、タマバエ、アブラムシなど、植物に入り込んで虫こぶを作る昆虫たちである。虫こぶは、植物が普段見られない形や色に変わるものが多いため、一般の方でも見た目だけで楽しむことができ、興味を持ちやすいと思われる。本書も、最初の見開きに書かれた虫こぶ達の写真を眺めるだけで、十分に楽しむことができるだろう。また虫こぶは、その組織自体は植物から構成されるものでありながら、昆虫側が、自らの都合の良いように植物の形態や生理状態を改変してできたものであるという点で、昆虫研究者と植物研究者両方の興味を引く対象でもある。本書でも、落葉した後に虫こぶを成長させるといった、驚きの生態を持つタマバエなどが紹介されている。この生理的メカニズムは未発表とのことで詳しく語られてはいないが、今後、論文などの形で目にするのが楽しみである。

本書を読んで感じたのは、徳田さんのフットワークの軽さ、なんでも前向きにやってみようという気概である。徳田さんには、タマバエの大家である湯川淳一先生(九州大学農学部)の弟子であることから、師匠と同じく「タマバエの研究者」というイメージを持っていた。しかし実際には、学部生時代からタマバエ研究の傍ら、オトシブミの研究を行っておられたそう。また、学位を取得する段になって学振PDに応募した際、事務的なミスにより応募ができなくなったことをものともせず、そのことにより、当初応募予定だった九州沖縄農研と後から誘われた産総研と、二つの研究所を経験することができたと前向きに捉えておられる。前述の九大農学部、九州沖縄農研や産総研を含め、現在の佐賀大学農学部に着任するまで、徳田さんは6つの研究室を渡り歩くことになったというから驚きである。このように、必ずしも戦略的にそうされたのではなく、徳田さんの意図が及ばないところで、結果的にそうなった部分が多いにも関わらず、徳田さん自身は、「自分の人生は、いき当たりばったりで、周りの人に恵まれたおかげで、何とかここまで過ごしてこられたのだとつくづく思う」と述べておられる。こうした経験をプラスに変えることができるのは、徳田さんのポジティブな思考による要素が非常に大きいだろう。現在、分類学や生態学の分野での就職は益々厳しくなっている。パーマネントの職を得るまでに、複数の研究室を渡り歩くことは珍しくない。いくつもの所属先を移動しなければならぬ状況で、自分にプラスになるものを

いかに取り入れられるかは、自分の気持ちの持ちよう次第なのだと思つづく感じさせられた。

「フィールドの生物学」シリーズは、若手で、まだパーマネントの職にはついていない研究者の方が執筆していることも多い。しかし、徳田さんは現在までに、佐賀大学農学部で研究室を5年近く主宰している。このため、研究室を運営するようになってからの話にも、かなりのページ数が割かれていることも本書の特徴の一つであろう。私は、昨年徳田さんが世話人を務める九州昆虫学セミナーで講演し、その際、徳田さんの研究室を見学させていただいた。徳田さんの研究室の学生の方々は生き生きとしており、自分の研究の意義や面白さを端的にわかりやすく伝えてくださったのが非常に印象に残っている。もちろん学生の方々、個々の努力もさることながら、徳田さんが如何に学生のことを考えて研究指導をされているのか本書を読んで改めてよくわかった。徳田さん自身、本書を読む対象として「将来大学教員になる可能性のある人」を挙げておられたが、他の教員の教育へのスタンスを詳しく聞く機会が限られているため、すでに大学教員として勤務している人にとっても参考になる内容だと思う。私自身は、大学に着任したばかりで、研究室に学生は配属されていないが、自分ならどのように研究室に配属された学生さんと接するだろうかなどと考えながら楽しく拝読させてもらった。また、佐賀大学農学部での前任者である鈴木先生の研究テーマや佐賀県ならではの自然を活かした生き物に関する研究にも手を広げ、「ウイルスから哺乳類まで、特定外来生物から天然記念物まで」というスローガンを掲げ、多種多様な生き物の生き様を明らかにすべく研究を推進しておられることなども興味深い。私のスタンスもそうであるが、徳田さんのようなナチュラルヒストリーを主眼とする研究室では、実際の生き物を前にして生じた疑問から研究をスタートさせる。そもそもが研究対象に制約はない上に、研究に使う手法も決まった方法がある訳ではなく、その時知りたい謎に最適な手法を用いて対応する。こういった環境下において徳田さんは、これまで所属された6つの研究室の特徴をうまく活かし、幅広い研究を展開できるすばらしい研究室を運営しているのだなあと改めて感じる。本書を読むことで、私も、人をわくわくさせるようなナチュラルヒストリー的発見をし続けたい、また徳田さんのように、そのような仲間の輪をどんどん広げていければいいなと改めて感じた。

(神戸大学理学研究科 末次健司)



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

協力研究員 (Affiliated Scientist)に関するお知らせとお願い

生態学研究センターでは、全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。平成29年3月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申し上げます。改めて平成29・30年度の協力研究員を募集いたします。新規及び引き続き協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は平成29年2月28日(火)までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。

申請書の様式は、<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/cooperative/cooperative-researchers.html> からダウンロードできますので、必要事項を入力の上電子メールでお送りください。なお、上記締切以後の申請についても随時受け付けています。

【申請書の提出先・問い合わせ先】

京都大学生態学研究センター共同利用担当 〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
E-mail: kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp Tel: 077-549-8200 / Fax: 077-549-8201

【京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ】

1. 生態学研究センター（以下「センター」という）の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
2. 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
3. 協力研究員の任期は原則として2年とする。

● センター関係者の動き ●

Tae-Soo Chon 氏 釜山大学（韓国）名誉教授が、特別招へい教員（特別招へい講師）として平成28年11月16日～平成29年2月14日までの予定で滞在中です。

● NIE-CER joint symposium の開催 ●

韓国国立生態学研究所（National Institute of Ecology: NIE）の招待で、12月9日に韓国NIEにおいて、NIEとCERの学術交流協定締結を記念するNIE-CER joint symposiumがおこなわれました。日本からは生態学研究センターの教員6名、椿宜高前センター長、センター滞在中のTae-Soo Chon博士（釜山大学名誉教授）が参加しました。